発話頭の「は」が生み出す「共話」

― 配慮の二面性の解明を目指して―

宮　本　淳　子

抄録

本研究では、隣接ペア「質問－応答」の応答部の発話頭に現れる「は」について、相手に対し省略した部分の連想・推論を強制し、丁寧さに欠けるにもかかわらず、誠実さ・好意・敬意の表明として心的関係を円滑に保つ役割を担い得るという矛盾（配慮の二面性）を紐解くため、「共話」の観点からのアプローチを試みた。具体的には、発話頭の「は」の助詞としての機能から直前の質問文内の語句との結びつきを踏まえた上で、応答側からの積極的な働きかけにより、ある種の共話を構築していることを、実際の談話データをもとに明らかにした。その変則的な共話は、発話頭の「は」が、前接する語句を省略するというより、むしろ浮かびあがらせることで「擬似的な共話」を構築していると捉えることができる。共話の成立には、会話参与者の積極的な姿勢や相手への気配りが不可欠であることから、発話頭の「は」が有する配慮の二面性の解明に「共話」の概念が有効である可能性を示した。

0．はじめに

話し言葉特有の現象として、隣接ペア[i]「質問－応答」の応答部の発話頭に現れる「は」[ii]は、本来、前接の語句を必要とする助詞の「は」であると考えられる。発話冒頭における「は」の単独使用は、相手に対し「は」に前接する語句を連想・推論することを強制しており、本来、丁寧さを欠いた表現である。しかし、その「は」により、相手の発話内の語句との強い結びつきを示すことは、会話への積極的な参与姿勢や相手に対する誠実さ・好意・敬意の表明として丁寧な対応を伝え得るとも捉えることができる。この発話頭の「は」が有する矛盾（配慮の二面性）を解明するため、日本人の会話における特徴の一つである「共話」の観点から検証していく。

1．研究の背景と目的

人は何かを伝えようとするとき、複数の表現の中から、（無意識のうちに、あるいは意識的に）その場に相応しい言葉や表現を選ぶ。「何を伝えるか」も大事だが、「どう伝えるか」によって、受け手の印象に大きな違いが生じるからである。これは文字による文章でも、リアルタイムで織りなされる言葉のやりとり、つまり会話においても同じである。現代では、電子メールをはじめとした文字によるコミュニケーションが浸透し、対面でのコミュニケー

---

[i]隣接ペア（adjacency pair）とは、Schegloff and Sacks（1973）が初めて用いた会話分析における重要な概念であり、対になった 2 つのターンから構成される会話分析の最小単位である。

[ii]本研究で用いる発話頭の「は」とは、発話の冒頭（発話境界）に現れる「は」であり、wa と発音される。音韻的な特徴として、名詞句等に後続する通常の「は」に比べ、長音傾向にある。

ションに不安を感じる人も少なくない。しかし、だからこそ現代社会における対面でのコミュニケーションにも様々な変化が生じていると考えられる。

そのような時代にあり、日本語の言語変化の一つとして注目されているのが、会話における発話頭の「は」である。発話頭に単独で現れる「は」は、本来、何らかの語句に付属する形でしか文章に現れないと定義されてきた助詞の「は」であると考えられる。そもそも助詞は、日本語の文構造の特徴の一つであり、日常会話においても必要不可欠なものである。しかし、発話頭の「は」を含む助詞の単独使用については、付属語としての観点から、従来、発話の誤りとして解釈され、研究対象から外れた扱いとなる傾向にあった。だが、有田ら（2012）は、日本人の新しいコミュニケーションスタイルを解明する上で重要な位置づけとして、発話冒頭に単独で現れる「は」に注目し、前接する語句の省略現象であると同時に、助詞の残存現象としても捉えることができるとの立場から研究を行い、「は」の前に省略されている語句として「名詞句」「後置詞句」「名詞節」「疑問節」が考えられること、通常の提題用法の「は」に前接する要素に概ね一致していること、さらに、発話頭の「は」が感動詞、あるいは接続詞への変化の途上にある可能性について示唆している。

一方、下谷（2010）では、助詞「は」の発展的な使用として、自然談話の発話頭に現れる「は」に注目し、大きく三つに分類[iii]している。このうち、本研究が対象とする隣接ペア「質問－応答」の応答部の発話頭に現れる「は」は、「シフトされた話題の取り立てと発話計画のシグナル」として、次のように基本形が示されている。

Turn1：B　独立した質問文・疑問文の形をした発話
Turn2：A　は（質問・疑問の答えとなる発話、又はそれに繋がる発話）
Turn3：B　Aの発話に対する反応・応答を表す発話やそれに関する質問

上記の形式で現れる「は」は、シフトされた話題を取り立てると同時に、その後の発話をどのように提示していくかという発話計画の組み立てを合図（signal）しているとされ、その後に続く発話が及ぶであろう範囲を投射する働きをしているとの考察から、談話標識（discourse marker）的な役割も担っていると指摘している（下谷，2010）。

つまり、これまでの先行研究では、発話頭の「は」について、助詞としての機能からアプローチしながらも、結果として会話の中では助詞以外の機能も持ち併せていることが示されているのである。以上のことからも発話頭の「は」の役割や機能を理解するためには、助詞としての観点はもちろん、発話頭で担っている談話上の他の機能（感動詞や談話標識）と合わせて考える必要があることは明らかである。

この点について、宮本（2013a）では、隣接ペア「質問－応答」の応答部の発話頭に現れる「はー」[iv]について、助詞としての観点と（感動詞や談話標識の機能を含む）フィラー（filler）としての観点からアプローチし、係助詞の機能を兼ね備えたフィラーであることにより、「ま

[iii]本研究で扱った以外の発話頭の「は」の分類として『対比・対照を表す「は」と発話の局所的な軌道調整』と『対比・対照から主題（話題）化へ』を挙げている。

[iv]宮本（2013a）では、フィラーとしての位置付けを重視しており、フィラーの音韻的特徴にも通じる長音傾向にある点を踏まえ、「は」を「は～」又は「はー」と表記しているが、本研究で扱う発話頭の「は」と同じ「は」を指している。

（ー）」や「あの（ー）」といった他のフィラー以上に相手の発話を引き受ける姿勢を強く印象づけることが可能となることを示している。それゆえ、発話頭の「は」は、上下関係の下の立場（相手への丁寧な態度を求められる側）にある者が主に使用し、自分の社会的立場や礼儀正しい対応を意識する場面で現れやすく、敬語と相俟って、誠実さ・好意・敬意の表明として相手との心的関係を円滑に保つ役割を果たしていると捉えることができる。しかしその一方で、発話頭の「は」により、前接するはずの語句を連想・推論させることは、相手に負担をかけることになり、丁寧さの表明とは逆の側面も持ち合わせているという矛盾が浮かび上がる。これは、Brown&Levinson（1987）のポライトネス理論におけるポジティブ・ポライトネス（他者との心理的距離を縮め親近感を出すための配慮）とネガティブ・ポライトネス（他者との心理的距離を保ち敬意を表すための配慮）が同時に使用されている発話行動となり、いわば、発話頭の「は」が有する「配慮の二面性」と言える。これについて、以下の会話例で説明する。

【例 1】
A：お店の定休日は何曜日ですか？
B：[は]　水曜日です。

この会話では、Bの「は」によって、Aは「は」に前接するはずの語句を連想・推論してBの発話を理解しようとする。Aの発話内から適当な語句を補うと次のようになる。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

A：<u>お店の定休日</u>は何曜日ですか？
B：（お店の定休日）[は]　水曜日です。

AがBの発話をこのように理解するためには、Bが<u>（お店の定休日）</u>を含め、全てを発話した時、あるいは「水曜日です。」とだけ発話した時と比較し、連想・推論の負荷がかかると考えられる。一方で、相手の発話内の語句と結びつくことで、相手の発話に丁寧に耳を傾け、その内容をしっかりと受け止めた姿勢が示されるとも捉えることができる。さらに基本的な発話スタイルが敬語であることと相俟って、発話頭の「は」は、真摯で丁寧な姿勢を示すことにも繋がっている。【例 1】の場合、Bがもし「水曜日です。」と応答した場合、言い方によっては少々そっけなく、ぶっきらぼうな印象になってしまう恐れがある。つまり、「は」が会話におけるクッション（和らげ）の役割を果たしているとも考えられる。このように、発話頭の「は」には、「配慮の二面性」がある。

そこで本研究では、この矛盾について解明すべく、「共話」（水谷，1983）の観点からのアプローチを試みる。もともと「共話」とは水谷の造語であり、日本人の会話の特徴として、互いに相手の話を完結し合う関係を持った会話スタイルを指す。その後、今日に至るまで、相手や周囲への「気遣い」を重視する日本人の会話を分析する上で欠かせないキーワードとして重要な研究対象となっている。共話の特徴の一つに次のような会話がある。

【例 2】
Ａ：ちょっとニュアンスがね・・・
Ｂ：ええ、ちょっと違いますね。

（水谷，1983 より引用）

ＡとＢが二人で「ちょっとニュアンスが違います」という一つの文章を完結させているのである。会話の「先取り」とも言えるこの形態をはじめとした共話を構築するための後部の発話（例 2 のＢ）は、「話し手の話に身を寄せ、心を寄せて聞いているということの積極的な表明手段」として捉えることができる（黒崎 ,1995)。二者間で問い、答えるという「対話」ではなく、互いに相手の話を完結し合う「共話」が日本人の会話で重視される理由として、会話における日本人ならではの「気配り」が挙げられる点を踏まえると、「共話」の概念は、発話頭の「は」が有する配慮の二面性を解釈する上でも重要な要素であると考えられる。

従って、本研究では、隣接ペア「質問－応答」という形式ではあるものの、ある種の「共話」が成立していることについて、実際の談話データをもとに明らかにしていく。

具体的には、発話頭の「は」について、発話内容（前後の文脈）からの側面と発話状況（立場・場所など）の側面から、それぞれの談話の共通点を探るとともに、「共話」の観点から質問文との結びつきを考察する。そして、「共話」の形態を生み出すことで、語句を省略しながらも丁寧さを示し得る理由について明らかにしていく。

2.0　談話データ

自然談話の隣接ペア「質問－応答」の応答部の発話頭に「は」が現れている音声データを文字化した。質問文の中でも「は」と結びついている語句だけが、取り立ての対象となるのであれば分かりやすいが、実際は「は」に限らず、他の助詞と結びついているケース（例えば「って」「を」「も」など）や助詞が省略されゼロ主題句となっているものが存在する。ここでは便宜上、取り立て対象語句が質問文において、どの助詞と結びついているかという点で分類し、述べていく。

2.1　取り立て対象語句＋ハ

2.1.1　ケース 1

次に示すのは、短大の授業において、学生（Ｓ）の自己紹介後、教員（Ｔ）が事前に記入されている自己紹介資料を参考にしながら質問している場面である(2013 年 4 月 30 日収録)。Ｓは教室の前方に他の学生（16 人）と対面するように立っており、視線を浴びながら発話している。

【断片 1】
Ｔ：で、あとは、今ここに書いてあるものだと寮に住んでますっていうことなんですね。
　　これは　あの　［寮の名前］ですか？
Ｓ：そうです
Ｔ：［寮の名前の一部］　あー　［寮の名前］での暮らしはどうですか？
Ｓ：$\boxed{\text{は}}$　結構　そうじとかが　大変です

Ｔ：そう・・・あの共同部屋？
Ｓ：じゃなくて　ひとりなんですよー

授業内での会話であり、他の学生の視線を浴びていることから、私的な内容でありながら「公的発言」としての意味合いが強く、丁寧さを意識する場面である。ＴとＳは、ともに敬語を用いているが、教員と学生という立場や年齢上、ＳがＴを敬う側であり、より丁寧な対応を求められる。そして丁寧な対応を示すことが望ましい立場のＳが質問に対し「は」を用いて応答している。発話頭の「は」の前に、直前の質問文内の語句を補って全文を完成させると次のようになる。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

Ｔ：[寮の名前の一部]　あー　[寮の名前] での暮らしはどうですか？
Ｓ：（[寮の名前] での暮らし）は　結構　そうじとかが　大変です。

「は」の前に語句を補ってＳの発話を理解することは、表面上ではＳの単独発話であるはずが、理解する上ではＴとＳの共話の形態を構築していると捉えることができる。従来の「先取り」による共話の形式では、Ｓに先取りの余地を与える必要がある。例えば、次のような具合である。

Ｔ：[寮の名前] での暮らしは・・・・
Ｓ：結構　そうじとかが　大変です。

しかし、【断片 1】ではＴの質問文が単独で完結しているため、Ｓに先取りの余地がない。従来の「共話」は、すべてを言い尽くさず相手に発話完結の機会を与えようとする話し手側の気配りと、積極的に共感の情を表そうとする聞き手側の気配りによって成り立っている（黒崎 , 1995）とされているが、このケースのように、質問者によって先取りの機会を与えられなかった場合でも、「は」を用いて、相手の発話内の語句を積極的に取り立てるという聞き手側の気配りによって変則的ではあるが、ある種の共話が成立し得ると捉えることができる。それは、本来省略せずに発話するほうが丁寧であるはずの発話が、語句の省略によって、むしろ相手への配慮を示し得る一要因と捉えることができる。

2.1.2　ケース 2

次に示すのは、当時、岩手・花巻東高校 3 年生の大谷翔平選手（Ｏ）がプロ野球のドラフト会議で日本ハムからの強行指名を受けた直後の会見である。会見には大勢のマスコミ関係者が集まっており、複数の記者（Ａ）からの質問に応じている場面（2012 年 10 月 25 日撮影、共同通信により YOU TUBE に投稿されたもの）である。高校生のＯにとっては、記者（質問者）全員が明らかに年上であり、年齢的な上下関係においてＯは「下」の立場にある。

【断片 2】
Ａ：もう一回 じゃあ 日本かアメリカかっていうことじゃなくて アメリカか日本ハムかっていうことで もう一度考えてみようっていう思いはありますか？

O：は ま 自分は ま どこの球団に ま 引いて頂いても ま アメリカで ま やろうっていう決断をして ま ああいう発表をさせて頂いたので ま 今は変わらないです。

この場合、質問文内の語句を用いて応答部の全文を完成させようとすると、次のようになる。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

A：もう一回 じゃあ 日本かアメリカかっていうことじゃなくて アメリカか日本ハムかっていうことで もう一度考えてみようっていう思いはありますか？
O：（もう一回 じゃあ 日本かアメリカかっていうことじゃなくて アメリカか日本ハムかっていうことで もう一度考えてみようっていう思い）は ま 自分は ま どこの球団に ま 引いて頂いても ま アメリカで ま やろうっていう決断をして ま ああいう発表をさせて頂いたので ま 今は変わらないです。

相手の発話内の語句を完全に繰り返すとなると、かなりの労力を要する。しかし、「は」によって直前の質問文内の語句と自分の発話を容易に結びつけることが可能となり、相手の発話内の語句を（発話はしていないものの）引用するような形で共話の形態を構築している。その点では、発話頭の「は」が前の質問内の語句との接着剤のような役割を果たしているわけである。また、その接着力は、結びつく語句が質問文内で既に「は」と結びついているとき、より強さを増す傾向にあると考えられる。つまり、質問文内でも「は」が使用されている場合、【断片 2】のように質問文が長い場合でも、結びついた箇所が分かりやすく、応答者主導による共話の形態が構築しやすくなる。発話頭の「は」は、位置の制限を除くとかなり自由に出現しているように見えるが、少なくとも、結びつく語句は、直前の発話において最も目立つ（salient）要素でなければならない（有田，2009）。最も目立つ要素でない場合、取り立てた語句の推論に労力がかかり過ぎてしまう恐れがある。会話参与者間のいわば暗黙の了解にならなければならない省略語句が正しく把握されなければ、共話として文章を完成させることができない。その点、質問文内において既に「は」が用いられている場合は、その最も目立つ要素が特に分かりやすいと考えられる。捉え方によっては、質問発話内の「は」と応答発話頭の「は」が重複しているようにも感じられるのだが、その「は」こそが、お互いの発話の「のりしろ」となって、より強く結びついているかのようである。

2.2　ケース 3・取り立て対象語句＋ッテ

次に示すのは、ラジオ番組の公開生放送における男性 DJ（A）と男性ゲスト（B）の会話である（2013 年 5 月 10 日・FM802）。

【断片 3】
A：あの　今夜はですね　なんとこのあと　このステージで、スペシャルライブを披露して頂くということになっております。みなさん　いかがでございましょうか　これ・・・
（会場からの拍手）
A：はい ラジオの生放送で　ライブやったことって　あるんですか？

B：は　ないですね。
A：わ！いやー　ま　これまでにね　こうやって　まあ今は　この　ステージがあって　目の前に客さんがいますので　ここはちょっと　このライブって感じがありますけども、これが同時に電波にのっていろんな所に伝わっていっているということなので・・・

Bは、当時17歳の新人歌手であり、DJとは年齢的な上下関係において「下」の立場にある。基本的な発話スタイルが敬語であることからも、Bが丁寧な対応を意識していることが分かる。このケースでも、上下関係の下にあたる者が発話頭の「は」を使用している。

また、この質問も完全文になっており、先取りの余地がない。しかし、相手の質問内の語句を取り立て「は」を用いていると考えると、省略された語句の存在により、ある種の共話が構築されていることになる。直前の質問内から語句を補って示す。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

A：ラジオの生放送でライブやったことって　あるんですか？
B：（ラジオの生放送でライブやったこと）は　ないですね。

「は」の直前の発話は「ラジオの生放送でライブやったことって、あるんですか？」という自らの経験を問う質問であり、「はい・いいえ」で回答することができるクローズドクエスチョンである。これは、一般的には、答えやすい質問形式である。しかも、この場面では、Bがデビューしたばかりの新人アーティストであるため、公開生放送でのライブ経験はないであろうという想定のもと、Aの質問がされていると考えられる。この質問に対し、Bが「ないですね。」と答えるのは、自然な会話の流れである。ただ、言い方によってはそっけなく聞こえる恐れがあるため、ここでは発話を和らげる機能をもったフィラーとしての「は」の機能が発揮されていると捉えることができる。

2.3　ケース4・取り立て対象語句＋助詞なし

次に示すのは、下谷（2010）において扱われている談話データである。Rが敬語を用いており、Aは基本的には敬語を用いながらも、一部「そうだよね」といった比較的くだけた言葉遣いをしていることから、精神的な上下関係としてAが上、Rが下の立場であると推測できる。

【断片4】
R：そういう　色んな方面があの　免疫学だったりが選べるので
A：うん
R：それを取っといた方がいいんじゃないかっていうアドバイザーの
A：ふん
R：忠告で
A：あ　そうだよね
R：一応今生化学っていうことで
A：ふんふんふん　え　で　将来どうするつもりなんです？

R：は　あ　なんかもし行けたら国連とか
A：ふん
R：そういうなんか国際機関で
A：あそうなの　ふん
R：あの　WHO って　ありますよね世界保健機関って
A：はいはいはいはい
R：あ　いうそういうそういう機関で働きたい（→続く）
（下谷，2010 より音声記号を省略して引用）

このケースでも心理的な上下関係の下の立場の者（R）が「は」を使用している上、直前の質問文は完結しており、先取りの余地がない。しかしながら、Rの「は」により、直前の質問内の語句と結びつき、新たな文を完成させ、ある種の共話を構築している。省略された語句を補って示す。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

A：え　で　将来どうするつもりなんです？
R：（将来）は　あ　なんかもし行けたら国連とか・・・

この「質問－応答」について、Aが先取りの余地を与えるような質問文を用いたと想定すると、次のようなやりとりが考えられる。

A：将来は・・・
R：なんかもし行けたら国連とか

つまり、質問文内では、「将来」が助詞と結びつかずゼロ主題句となっていたが、共話を意識した場合、質問文でも「は」が用いられると推測できる。助詞が省略されていた語句と「は」が結びついた場合でも、自然に共話を生み出せるのは、共話を意識した場合の質問文の形態に従っているからだと捉えることができる。

2.4　取り立て対象語句＋ヲ

2.4.1　ケース 5

この談話は【断片 2】と同じ会見の一部であるが、質問者（K）は違う人物である。また、順序としては【断片 2】以前の部分である。

【断片 5】
K：今 ドラフトの指名を受けて 率直な今の気持ちを教えて下さい。
O：は ま こういう発表はさせて頂きましたけど　ま 自分の ま 思いは変わらないですし、ま あの ま 指名して頂いたというか　ま 評価をして頂いたのはすごく嬉しく思っています。

「は」は、あってもなくてもOの発話の命題的意味は変わらない。しかし、このケースの「は」

も音韻的に長音化しており、質問を処理して言葉をまとめながら話し出すといったフィラーとして機能している印象が強い。「は」に前接する語句を直前の発話文内から補うと、次のようになる。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

K：今 ドラフトの指名を受けて 率直な今の気持ちを教えて下さい
O：（今 ドラフトの指名を受けて 率直な今の気持ち）は　ま こういう発表はさせて頂きましたけど　ま 自分の ま 思いは変わらないですし　ま あの ま 指名して頂いたというか ま 評価をして頂いたのはすごく嬉しく思っています。

Oは、発話頭に「は」を用いることで、質問文を最大限に利用し、新たな文を完成させることに成功している。前述のように、質問文で「は」が用いられていれば、それを受けた応答部の発話頭の「は」が結びつく語句を推論しやすいと考えられるが、質問文で「は」が用いられなくとも、共話を意識した場合、質問文はどのようにされるべきかを考えたとき、「は」が用いられる場合は、発話頭の「は」が助詞の力を発揮しやすいと考えられる。このケースで、Kの質問が先取りの余地を与えるように発話すると、次のような質問が考えられる。

K：今 ドラフトの指名を受けて 率直な今の気持ちは・・・
O：ま こういう発表はさせて頂きましたけど　ま 自分の ま 思いは変わらないですし　ま あの ま 指名して頂いたというか　ま 評価をして頂いたのはすごく嬉しく思っています

従来の先取りによる共話の成立は文の前半（本研究では質問文）によるところが大きいことがこのケースでも分かる。文を敢えて途中で止め、相手が容易に続けられるような発話（質問）をすれば、共話が成立しやすい。一方で、この形態を生み出そうとした場合、質問文内の「を」が「は」になることが、このケースで分かる。つまり、応答側が共話を生み出そうとしたとき、発話頭に用いられる「は」は、従来の先取りによる共話の質問文で考えた時、取り立てた語句と結びついている助詞なのだと理解できる。

2.4.2　ケース6

次のケースは、ケース5と同様に、共話を意識し先取りの余地を与える質問文を推測した場合、「を」が「は」になると予想される。

【断片6】
H：その　四年制なんですよ
Y：うん
H：んで　んで　日本の高校に合わせると三年制になるんで
Y：三年制　うんうんうん
H：９年生から６０人入って
Y：うん
H：１０年生からまた６０人入るっていう
Y：へ

H：どっちでもいいよみたいな
Y：あ　そうなんだ　おもしろいね
H：で僕は9年から入ったんで　一応四年間
Y：へ　そっかそっかそっかそっか　え　じゃどういうふうに教育を受けていくの？
H：は　なんか
Y：英語で？
H：え　半分英語で
Y：うんうんうん
H：半分日本語ぐらいですね
Y：あ　それなんか　授業の一時間中半分英語で半分日本語？
H：いや　はい
Y：それとも
H：授業によって　日本語　あるいは英語って感じで（→続く）

（下谷，2010より音声記号を省略して引用）

「は」の発話者であるHは「～ですね」と敬語を用いている一方、Yには「～受けていくの？」といった言葉遣いが用いられており、上下関係ではYが下の立場にあると推測できる。このケースでも、はやり「下」の立場にある者が「は」を使用している。そして、この質問文も完結していて、先取りの余地がない。にもかかわらず、「は」により直前の発話文内の語句と結びつき、共話を構築していると捉えることができる。さらにこのケースでは、Yの相づち」による共話も特徴的である。会話参与者がお互いに心を寄せ合い、気遣いながら、会話を進めている様子が伺える。相づちも含め、発話頭の「は」を含む一つの文章を以下のように二人で構築している。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

Y：え　じゃどういうふうに教育を受けていくの？
H：（教育）は　なんか
Y：英語で？
H：え　半分英語で
Y：うんうんうん
H：半分日本語ぐらいですね。

Yの発話を、先取りの余地を与える質問文にすると、次のようなやりとりが考えられる。

Y：え　じゃ教育は・・・
H：半分英語で・・・

共話を意識すると質問文内でも「は」が用いられることが分かる。発話頭に「を」ではなく「は」が用いられる理由は、共話の観点ならば理解できると言える。

2.5　ケース 7・対象語句＋モ

次の談話資料は、静岡放送で放映されたテレビ番組「密着警察 24 時！ 犯罪捜査最前線 SP」（2013 年 3 月 27 日）における警察官（P）と女性（M）の会話である。この直前，未成年の少年がタバコを吸っているところを警察官が見つける。尋問により、母親に金を渡しタバコを購入していることが発覚したため、迎えに来た母親に対し警察官が詳しい状況を聞く場面である。

【断片 7】
P：で いつからですか？
M：んー 1 年くらい前
P：1 年くらい前から 1 日何箱くらい買ってます？
M：いや 1 日に 何箱も買いません 1 週間に 2 箱・・・
P：1 週間に 2 箱くらいを継続的に？
M：はい
P：お父さん お父さんが買うことも あります？
M：は 主人は ほとんどないですね。 私・・・
P：あーなるほど．これちょっと ま あのー よろしくないことっていうのは分かりますよね？
M：えー

未成年にタバコを買い与えるという違法行為をしているMはPに対し、心理的には上下関係における「下」の立場である。相手に対し、丁寧な対応をし、配慮を示すことは、相手への心象を良くし罪を軽減させたいという「自己防衛」の気持ちが表れているともいえる。ここでも心的関係を円滑に保とうと丁寧な対応を意識する側が発話頭の「は」を用いていることが分かる。また、このケースでも、Pが完成文として質問を投げかけているため、Mには先取りの余地がない。しかしながら、「は」を用い、Pの発話内の語句を取り立てることで、Mの発話は共話の形態となる。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

P：お父さん お父さんが買うことも あります？
M：（お父さんが買うこと）は 主人は ほとんどないですね。 私・・・

質問文内で「も」と結びついている語句が共話を意識した場合も「は」になった点について、このケースではMが「主人はほとんどない」という内容の発話をしようとしており、「も」を用いると、「も・・・ある」という文の構造となってしまい、意図と異なるため、発話の最初の段階で「は」と軌道修正していると捉えることができる。

2.6　ケース 8・取り立て対象語句の候補が複数存在

次に示す談話資料はラジオ（K-MIX 静岡エフエム放送）の生放送内で女性パーソナリティ（P）が一般のリスナー（Y）と電話で話している場面（2011 年 11 月 2 日）である。ラジオでの会話は、Yにとって非日常の体験である。内容は雑談に近いが、ラジオを通して誰が聞いているか分からないというプレッシャーの中でYは発話していると考えられる。メディ

アでの発言であるため、公的発言として捉えるべきであろう。そしてＹとＰの関係であるが、ラジオパーソナリティであるＰはＹからすると、通常は直接話すことが出来ない特別な存在である。また、この番組では事前に参加者を募っており、参加を希望している時点で、Ｙには「Ｐと話してみたい」というＰへの好意があると考えられる。

【断片 8】
Ｐ：あの 今も あのー 結構 会ったりはしてるんですか？
Ｙ：あのー 家が掛川なんで そんなには 会えないんですけど
Ｐ：あ よっちゃん 62 さんは どちらにお住まいですか？
Ｙ：は 富士市です
Ｐ：あっそっかー じゃあねーそんなちょこちょこじゃないですね

このケースでも、発話頭の「は」の直前の質問文は完結しており、Ｙには先取りの余地がない。先取りが難しい発話に対し、Ｙが「は」を用いて積極的に共話を生み出していると考えると、次のように語句を補うことができる。（質問内の対象語句に下線、補った部分に括弧を付けて示す。）

Ｐ：あ よっちゃん 62 さんは どちらにお住まいですか？
Ｙ：（住まい）は 富士市です。

このケースでは、「は」の前に「それ」や「それについて」を補う（発話したと仮定する）と、実際の会話としては、ぎこちない印象となる。その点、共話の観点から、質問文内の語句と結びつき、そのまま引用していると考えると、自然な会話がイメージできる。
ただ、前述のように発話頭の「は」は質問文内の「は」との結びつきが強いため、「は」の前に補われる語句は「住まい」ではなく、「よっちゃん 62 さん」であるとも考えられる。

Ｙ：（よっちゃん 62 さん）は　富士市です。

この文章は、一文のみで理解しようとすると、少々違和感がある。しかし、会話の流れの中で理解すると、ほとんど違和感がない。例えるならば、喫茶店でメニューを注文する際の「私はコーヒー。」という発話に違和感がないのと同じである。ただ、このように、前接する語句が複数推論できる場合は、推論の負担が増えることになる。ここで重要な点は、「は」から始まった発話によって、相手が求める情報（ケース８の「富士市」という応答）が提供されているかである。結びついた語句が、正確には判断しづらくても、質問に対する答えとして必要な情報が満たされていることが、会話としては大事である。つまり、共話の構築には失敗しても、会話としては成立するやりとりが存在するといえる。

３．考察

以上をまとめると、自然談話の隣接ペア「質問－応答」の応答側の発話頭に現れる「は」は、前接する語句を必要とする助詞としての機能から、何らかの語句との強い結びつきを感じさ

せ、実際に直前の質問内の語句と結びつくことにより、ある種変則的な共話を構築していると捉えることができる。それは、実際の発話文としては、従来から指摘されている「先取り」の形態にぴったりと一致するものではないが、「は」の前に省略された語句を直前の発話から補うことで、従来の「先取り」による共話の形態と同じ文章を構築していると言える。つまり、発話頭の「は」は、前接する語句を省略するというより、むしろ積極的に浮かびあがらせ、あたかもそこに語句が存在するかのように振る舞うことで、「擬似的な共話」を構築しているのである。この「バーチャル共話」とも言える応答側主導の共話形態を成立するためには、従来の先取りによる共話同様、応答側が相手の発話に注意深く耳を傾け、その内容を理解し、適切な語句を取り立てることが必要である。さらに、「は」によって結ばれた語句を連想・推論する側（質問側）にも、会話に対する積極的な参与姿勢が求められる。このように発話頭の「は」は、会話参与者同士が共同して一つの発話を完成させているという一体感や臨場感の創出に貢献していると考えられる。

通常、本研究で扱った談話データのように、質問文が完結している隣接ペア「質問―応答」の場面では、形式的な情報のやりとりになりがちであり、そのような会話はシナリオ通りのようで面白味のない、盛り上がりに欠ける（黒崎, 1995）。応答側が発話頭に「は」を用い「擬似的な共話」を構築することは、本来そのように形式的な会話になりがちな発話に対し、面白みや盛り上がりのある会話を望む姿勢を表し、会話への積極性を提示し得ると捉えることができる。以上のことから、発話頭の「は」により、前接の語句を相手に連想・推論することを強制しながらも、相手への丁寧で真摯な対応を示し得るという「配慮の二面性」の解明に「共話」の概念が有効であると考えられる。

4．おわりに

発話頭の「は」は、付属語としての機能や共話による会話形態が、いわば「染み付いた」状態の日本語母語話者だからこそ用いられるのであり、相手も同じような認識（文法能力）を持っているからこそ、その効果を発揮すると言える。発話頭の「は」に関する研究がなされる根本的な背景として、このような日本語母語話者の有する助詞「は」に対する、ある種の特別な感覚があること自体が興味深い。「は」が単独で存在することはなく、何らかの語句に付属する形で文章に現れるものだという認識が定着しているからこそ、発話頭で「wa」が発話されると、「わ」ではなく「は」と捉え、自ずと何らかの語句を補って理解しようとする。同じく発話頭で「えー」や「まー」といったフィラーが現れても、その前に前接する語句があるはずだと考える日本人がいないのに対し、「wa」を耳にした場合は、当たり前のように何らかの前接する語句との結びつきを前提に理解しようとする。この思考回路は、日本語における「は」の文法的な正しい理解なくして、ありえない。加えて、会話における気遣いの精神が発話頭の「は」の使用の前提となるなら、同じく配慮に関しての二面性を持った「ぼかし表現」（陣内, 2006）のように、年代や性別による使用、また感じ方の違いを調査することで、発話頭の「は」が示す現代日本人のコミュニケーションの様相を理解することに繋がるはずである。

参考文献

有田節子（2005）．対話における「文頭の『は（wa）』」の機能について

有田節子（2009).「裸のハ」についての覚え書き
有田節子 白井 英俊（2012）. 発話冒頭に出現する助詞に関する研究 : 話し言葉特有の現象の解明を目指して（代表者：有田節子 2008 ～ 2011 年度科学研費費補助金（基盤研究（C）研究成果報告書）
黒崎良昭（1995）．日本語のコミュニケーション　－「共話」について－
下谷麻記（2010）．発話頭に現れる助詞「は」の使用とその相互行為上の役割　－自然会話における文構造の一考察－
陣内正敬（2006).「ぼかし表現の二面性　－近づかない配慮と近づく配慮－」国立国語研究所編　『言語行動における「配慮」の諸相』pp.115-131　国立国語研究所
水谷信子（1983).「あいづちと応答」水谷修編『話しことばの表現』pp.37-44　筑摩書房
宮本淳子（2013）．発話頭に現れる「は～」（発音わ～）の機能　社会言語科学会第 32 回大会発表論文集　pp.22 － 25
山根知恵（2002）．日本語の談話におけるフィラー　くろしお出版
Brown.P&Levinson.S.C（1987）．Politeness: Some Universals in Language Usage, Cambridge
University Press < 斉藤早智子他訳（2011）．ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象　研究社 >